

# 台湾の俳句事情

トッパダ シゲナオ  
鳥羽田 重直

## 1. 台湾の俳句の歴史

台湾の俳句の歴史は、大きく二期に分けることができる。第一期は、1895年から1945年までの日本統治時代の50年間、第二期は、1970年から現在までの45年間であり、この45年は「台北俳句会」の歴史でもある。台湾の俳句は、途中空白の時期はあるものの、実に95年という長い歴史を有していることになる。

今回は第二期を中心に台湾の俳句事情について報告するのが目的であるが、第一期について簡単に触れておきたい。第一期はさらに明治期<sup>①</sup>、大正期、昭和期の三期に分けることができる。明治期は、渡邊香墨（助治郎）、小林李坪（里平）、岩田鳴球（久太郎）らの子規の直弟子による「日本派俳句」の時代、大正期は、諏訪素濤（忠蔵）を中心とした「碧（河東碧梧桐）派・新傾向俳句」の時代、昭和期は、山本孕江（昇）の指導による「ホトトギス・ゆうかり」の時代である。山本孕江は「台湾俳句」確立のため、1921年、俳誌『ゆうかり』を創刊後、毎月雑誌を発行、1945年、いったん休刊となったが、その後復刊されることはなかった。第二期の最初の年1970年は、現在まで続いている「台北俳句会」が黄靈芝氏（現会長）によって結成された年である。

## 2. 台北俳句会

黄靈芝氏によって1970年に結成された台北俳句会は、その翌1971年には、すでに合同句集『台北俳句集』第1集を刊行、以後ほぼ年一回のペースで刊行さ

れて、先般（2015年7月）、第43集が刊行された。創立40周年にあたる2010年には、故人を含む実に212名もの作品を収めた『台北俳句会四十周年紀年集』が刊行されている。会長の黄霊芝氏は、2003年、『台湾俳句歳時記』（言叢社）を出版、それにより2004年、第3回「正岡子規国際俳句賞」を受賞された。台北俳句会は、毎月第二日曜日に台北市内の国王大飯店で句会を行っているが、私は、2007年9月の句会に初めて出席をして以来今日まで、数回ほど出席した以外は、毎月欠席投句を続けてきた。最近では今年7月の台北俳句会創立四十五周年記念句会に出席をした。

### 台北俳句会小史<sup>②</sup>…第二期（含全国日語俳句大会）

年	記 事
1956年（昭和31年）	<p>こうれいし 黄霊芝氏、この年、日本大使館員や商社の日本人が集まって創立した俳句の会「台北相思樹会」に誘われてメンバーとなる。台湾人でこの会に加わっていたのは、黄霊芝氏と高名な洋画家楊三郎の妻許玉燕の二人だけ。のちに林苴子が参加。</p>
1970年（昭和45年）	<p>6月、中華民国ペンクラブ主催の「第三回アジア作家会議」が台北で開催され、日本から川端康成を団長に、中河与一、五島茂・美代子夫妻、東早苗（俳誌『七彩』主宰）などが訪台、会議終了後、中河与一、東早苗を黄霊芝氏が台南まで案内した。その際、東早苗の勧め（当初は『七彩』の台北支部を結成するという話）もあり、黄霊芝氏は「台北俳句会」結成の決心をし、事実上の代表となる。『七彩』との縁は一年足らずで消える。</p>

1971年（昭和46年）	10月10日、『台北俳句集』第一集（出句者25名）を自分たちの手で刊行、台湾の俳句会として独立する。
1972年（昭和47年）	10月10日、『台北俳句集』第二集刊行（出句者24名）。
1974年（昭和49年）	1月、『台北俳句集』第三集刊行（出句者29名）。
1975年（昭和50年）	1月1日、『台北俳句集』第四集刊行（出句者28名）。
1976年（昭和51年）	1月1日、『台北俳句集』第五集刊行（出句者25名）。
1977年（昭和52年）	1月、『台北俳句集』第六集刊行（出句者29名）。
1978年（昭和53年）	2月1日、『台北俳句集』第七集刊行（出句者30名）。
1979年（昭和54年）	2月、『台北俳句集』第八集刊行（出句者37名）。
1980年（昭和55年）	2月1日、『台北俳句集』第九集刊行（出句者47名）。
1981年（昭和56年）	4月、『台北俳句集』第十集刊行（出句者57名）。
1982年（昭和57年）	4月1日、『台北俳句集』第十一集刊行 （出句者66名）。
1983年（昭和58年）	4月1日、『台北俳句集』第十二集刊行 （出句者74名）。
1984年（昭和59年）	7月1日、『台北俳句集』第十三集刊行 （出句者65名）。
1985年（昭和60年）	4月1日、『台北俳句集』第十四集刊行 （出句者65名）。
1986年（昭和61年）	7月、『台北俳句集』第十五集刊行（出句者67名）。
1987年（昭和62年）	8月1日、『台北俳句集』第十六集刊行 （出句者73名）。

1988年（昭和63年）	8月、『台北俳句集』第十七集刊行（出句者73名）。
1989年 （昭和64年・平成1年）	8月30日、『台北俳句集』第十八集刊行 （出句者68名）。
1991年（平成3年）	3月1日、『台北俳句集』第十九集刊行 （出句者64名）。
1992年（平成4年）	5月1日、『台北俳句集』第二十集刊行 （出句者60名）。
1993年（平成5年）	2月、『台北俳句集』第二十一集刊行（出句者68名）。
1994年（平成6年）	6月30日、『台北俳句集』第二十二集刊行 （出句者68名）。
1995年（平成7年）	10月30日、『台北俳句集』第二十三集刊行 （出句者67名）。
1997年（平成9年）	3月、『台北俳句集』第二十四集刊行（出句者64名）。
1998年（平成10年）	12月30日、『台北俳句集』第二十五集刊行 （出句者62名）。
2000年（平成12年）	6月30日、『台北俳句集』第二十六集刊行 （出句者61名）。 7月、「台北俳句会」が創立30周年を迎える。 12月1日、『台北俳句集』第二十七集刊行 （出句者68名）。 12月10日、台北国王大飯店にて「台北俳句会創立30周年記念祝賀会」を挙げる。

2001年（平成13年）	12月30日、『台北俳句集』第二十八集刊行 (出句者66名)。
2002年（平成14年）	1月30日、『台北俳句集』第二十九集刊行 (出句者61名)。
2003年（平成15年）	4月15日、黄靈芝著『台湾俳句歳時記』刊行（言叢社）。 6月30日、『台北俳句集』第三十集刊行 (出句者56名)。 8月1日、『台北俳句集』第三十一集刊行 (出句者58名)。
2004年（平成16年）	11月、黄靈芝氏、『台湾俳句歳時記』により、第3回「正岡子規国際俳句賞」を受賞。
2005年（平成17年）	7月、台北国王大飯店にて「台北俳句会創立35周年記念祝賀会」を挙げる。 7月10日、『台北俳句集』第三十二集刊行 (出句者52名)。
2006年（平成18年）	7月1日、『台北俳句集』第三十三集刊行 (出句者50名〈内故人1名〉)。
2007年（平成19年）	9月1日、『台北俳句集』第三十四集刊行 (出句者56名〈内故人6名〉)。 9月9日、台北俳句会（於国王大飯店）に初めて出席する。句会（出句者46名、出席者28名）。
2008年（平成20年）	3月1日、『台北俳句集』第三十五集刊行 (出句者53名〈内故人3名〉)。

2009年（平成21年）	5月1日、『台北俳句集』第三十六集刊行 （出句者55名〈内故人3名〉）。小品20句出句。
2010年（平成22年）	12月10日、『台北俳句会四十周年紀年集』刊行（出句者〈現役54名、故人等123名、その他35名〉）。小品30句出句。 12月12日、台北国王大飯店にて「台北俳句会創立40周年記念祝賀会」を挙る。出席する。句会（出句者57名、出席者34名）。 6月9日、第一回全国日語俳句大会開催。 （参加大学 11校） 6月9日、『ゆうかりふたす』 <sup>③</sup> 創刊號発刊 （発行人 義守大學校長傅勝利）。
2011年（平成23年）	9月10日、『台北俳句集』第三十七集刊行（出句者52名〈内故人3名〉）。小品20句出句。 5月27日、第二回全国日語俳句大会 （参加大学 15校） 6月3日、『ゆうかりふたす』第二號刊行。
2012年（平成24年）	4月8日、『台北俳句集』第三十八集刊行（出句者47名〈内故人1名〉）。小品20句出句。 5月11日、第三回全国日語俳句大会開催。 （参加大学 16校） 7月31日、『ゆうかりふたす』第三號刊行。 8月15日、『台北俳句集』第三十九集刊行（出句者51名）。小品20句出句。

2013年（平成25年）	6月14日、第四回日語俳句大会開催。 (参加大学 13校)
2014年（平成26年）	5月30日、第五回日語俳句大会開催。 (参加大学 17校)
2015年（平成27年）	5月29日、第六回全国日語俳句大会開催。 (参加大学 12校) 7月12日、台北俳句会創立45周年記念句会。(出席) 7月12日、『台北俳句集』第四十一集(出句者41名)・ 『台北俳句集』第四十二集(出句者40名)・『台北俳句 集』第四十三集(出句者40名)同時刊行。各集に小 品20句出句。 7月31日、『ゆうかりぶたす』第四號刊行。

毎月の句会の方法は、2012年12月までは、会員は事前に会長の黄靈芝氏宛に作品を送付、黄氏が句稿を作成、句会当日出席者全員が互選をし、その結果を後日黄氏が講評を付けて（すべて手書き）会員に配布する方法がとられてきたが、黄氏が体調を崩され、2013年1月からは、句稿作成の担当が会員の杜青春氏に代わり、黄氏の講評も少なくなった。会長をはじめ会員の高齢化により、出句者、句会の出席者の数が減少傾向にあり、若い人をいかにして掘り起こすかが課題になっている。後に紹介するが、そのための試みも行われつつある。2013年9月の句会以降は、海外在住者等遠隔で句会に参加できない人などにも、一人でも多く選句に参加してもらいたいとの会員の要望により、句会欠席者にはメールでの選句方式が取り入れられた。

2007年9月の台北俳句会に初めて出席以来、これまで毎月の句会の状況を記録してきたが、最近六か月分を次に示す。○の中の数字は互選による得点数。

得点上位3位までを収載した。筆者の作品も掲載する。

■2015年（平成27年）中華民国104年

《句会日》	《出句者数》	《出席者数》
○ 6月14日	39人	22人（含メール選句）
⑨ 短夜やなほ読み終へぬ戦中記		北条千鶴子
⑤ 青嵐犬一日の家出かな		黄葉
⑤ 鹹蚶売婆がお負けの二つ三つ （①言行の一致せぬ奴冷し酒		李錦上 ※（他5点句1句） 鳥羽田重直）
○ 7月12日	38人	33人（含メール選句）
⑦ 休耕の田畦太らせ夏の草		廖運藩
⑦ 夏草や石碑に台湾開拓史（芝山巖）		劉竹村
⑤ 夏草や祖先の墓碑の字の薄れ （②草いきれ歩く仲間がゐて歩く		張繼昭 ※（他5点句1句） 鳥羽田重直）
○ 8月9日	44人	30人（含メール選句）
⑥ 路地裏は国境知らぬ月と酒		遙裕禾
⑥ 能面の眉目の翳り夏の月		唐澤まちこ
⑤ 羽音して鴨のいのちの確かなる （①退け時をなんども逃し暑気払ひ		李秀恵 ※（他5点句1句） 鳥羽田重直）
○ 9月13日	42人	26人（含メール選句）
⑨ 水牛の家路知つたる歩みかな		三宅節子
⑥ 天の川音なく届くメールかな		浅木ノエ
⑤ 盤石を走る走り根樹王祭 （②ナイターの三万余人のひとりかな		廖運藩 ※（他5点句3句） 鳥羽田重直）
○ 10月11日	36人	23人（含メール選句）
④ 鯛雲男の旅の荷の小さし		陳蘭美
④ 残業の灯火を消せば秋の声		イスタダ・アリーマン



- |                    |       |             |
|--------------------|-------|-------------|
| ④ 九降風乾く地蔵の御供物      | 李錦上   | ※(他4点句3句)   |
| (②) 鯛雲紛争絶えぬ地球かな    | 鳥羽田重直 |             |
| ○ 11月8日            | 37人   | 24人(含メール選句) |
| -----              |       |             |
| ⑤ 野佛の生涯孤独露月夜       | 廖運藩   |             |
| ⑤ 木欒子雨降る中の月明り      | 游細幼   |             |
| ⑤ 百年の庫裏の門番木欒子      | 李秀恵   | ※(他5点句1句)   |
| (③) あくまでも自己流といふ松手入 | 鳥羽田重直 |             |

これらの作品中に見える季語「鹹蜆」<sup>キヤムラア</sup>、「水牛」<sup>チウオンツェー</sup>、「樹王祭」(神木を参拝祈願する)、「九降風」<sup>カウカンホン</sup>(陰暦九月頃の新竹地方の風)、「木欒子」<sup>もくげんじ</sup>(台湾原産の落葉喬木)などは、いわゆる台湾季語と呼ばれる台湾独特のもので、すべて黄靈芝氏の『台湾俳句歳時記』に載っているものである。カタカナは台湾語の読み方。因みに、これらの季語を用いた黄靈芝氏の作品を紹介する。

鹹蜆仔 <sup>キヤムラアアーぼしや</sup> 婆娑れの果ての博徒の餉	黄靈芝
	(「鹹蜆仔」は、蜆の醤油浸し)
水牛 <sup>めお</sup> の妻夫の別れの屠殺場	黄靈芝
オランダを見もせし樹王祭 <sup>めお</sup> らるる	黄靈芝
九降風知らでの穢吏 <sup>たわこと</sup> の寝 譚	黄靈芝
木欒子 <sup>めお</sup> わけのわからぬ名ながら絵	黄靈芝

台湾には台北俳句会のほかに、小規模ではあるが、「春燈台北句会」(「春燈」久保田万太郎創刊。現主宰安立公彦)がある。これは当時在台していた春燈の会員加藤敬一(1991年没)が1980年8月に創始し、今も台湾在住の春燈会員を中心に毎月句会が行われている。現在は台北俳句会の会員でもある廖運藩氏が代表をつとめている。作品を春燈俳句台北句会報十月号より抜粋する。

夜泣きする高圧電線九降風	廖運藩
秋うらら職員室に転校生	沢あしび
燈下親しフェスブックのきりもなや	呉文宗
トップシェフなべて男や馬肥ゆる	呂秀文
燈下親し勝負のつかぬへば象棋	呉桂君
気風よき男性合唱敬老日	陳妹蓉

### 3. 全国日語俳句大会

台南の義守大学応用日語学系日語俳句大会実行委員会主催による、台湾国内の大学の日語科の学生を対象とした全国日語俳句大会が2010年に開催され、今年で六回目を迎えた。このような催しを通して、若い人たちが俳句に関心を持つ人が現れ、やがて台北俳句会の一員となり活躍する人が出てくることが期待される。第一回大会以来の参加校数等を以下に記す。なお、大会の結果をまとめた雑誌『ゆうかりぶたす』が刊行されている。その雑誌は本来は今回で第六号となるところを、諸般の事情により、第三号で中断していたが、今年7月に第四回から第六回までの三回分をまとめて第四号として刊行された。

第一回全国日語俳句大会（2010年）

（参加大学：11校〔応募作品：題詠71句、雑詠78句〕）

第二回全国日語俳句大会（2011年）

（参加大学：15校〔応募作品：題詠105句、雑詠162句〕）

第三回全国日語俳句大会（2012年）

（参加大学：16校〔応募作品：題詠112句、雑詠143句〕）

第四回全国日語俳句大会（2013年）

（参加大学：13校〔応募作品：題詠127句、雑詠119句〕）

第五回全国日語俳句大会（2014年）

（参加大学：17校〔応募作品：題詠132句、雑詠168句〕）

## 第六回全国日語俳句大会（2015年）

（参加大学：12校〔応募作品：題詠82句、雑詠97句〕）

作品の審査には、主に台北俳句会のベテラン会員があたっている。第六回大会の応募作品の中から入選作品の一部を紹介する。題詠の題は、ぶらんこ・落葉・春燈・山眠る・立春他。

題詠	山眠る今日も返事を待ちながら	古若璇（文化大学）
	山眠るそろそろ起きて笑つてよ	楊晴（銘傳大学）
	立春や老友二人蕎麦啜る	辛佩憶（文化大学）
	山眠る孤独の白を抱きしめる	蔡雨生（義守大学）
	ぶらんこに一つ一つの笑い顔	陳詠謙（南台科技大学）
雑詠	祖母の手にわが手重ねる春の月	林姁榮（文化大学）
	眼を開けてぐつすり眠る熱帯魚	郭育如（義守大学）
	水面に漣立てる赤とんぼ	林學遠（銘傳大学）
	風鈴や緑の風の子守唄	陳家榛（義守大学）
	家を出る春一番の通学路	王芝穎（義守大学）

### 4. 台湾学生俳句育成会

全国日語俳句大会の運営や大会誌『ゆうかりぶたす』の発行など財政面での支援を目的として、2012年、日本及び台湾の台北俳句会会員の有志が相計り、台湾学生俳句育成会を立ち上げた。財政的支援が主な目的ではあるが、全国日語俳句大会の応募作品の選考にあたりもしている。

### 5. 日台連句

俳句は連句の発句が独立したものであるが、俳句を作る者の中には、連句をやっている者が少なからずおり、筆者もその一人である。台北俳句会の会員の中

から連句をやらうとの話が持ち上がり、日台両国の有志ですでに五回歌仙を巻き、現在六回目が進行中である。メンバーの中に連句の経験者がおり、その方に捌きをお願いしているが、時には膝送りという方法をとることもある。

	(連衆)	(起首)	(満尾)
①歌仙「夕涼み」の巻	(4)	2012年9月19日	2013年5月29日
②歌仙「馬酔木野」の巻	(7)	2014年4月5日	2014年6月8日
③歌仙「七五三」の巻	(7)	2014年11月15日	2015年3月1日
④20韻「ゆくりかに」の巻	(3)	2015年3月23日	2015年5月7日
⑤歌仙「竜山寺」の巻	(5)	2015年5月26日	2015年10月8日

参考までに最近満尾となった作品を掲載する。

#### 歌仙「竜山寺」の巻

連衆ーイスタダ・アリーマン、楊硯涯、鳥羽田重直、杜青春、村田倫也	
薨より時雨るる音や龍山寺	イスタダ・アリーマン
捧ぐる線香散る木の葉髪	楊硯涯
舞ひ落ちる色褪せし日々跡もなし	イスタダ
ふるさとだけは今も変わらず	鳥羽田重直
天の月心の月と語らいし	杜青春
精算しろと迫る秋風	村田倫也
ウ三々五々花野に群れる同期会	硯涯
肌寒き夜の語り合ふ夢	イスタダ
ワンルームマンションに愛満ち溢れ	重直
小三も来る小王も来る	青春
お日様が勝手にしろと笑ってる	倫也
どこにしようか明日の波乗り	硯涯

羽音を殺す鴉の木下闇	イスタダ
二胡の音聞こえ月の涼しき	重直
足ありも足なしも来る古屋敷	青春
狐と狸 <small>とわ</small> 永久のライバル	倫也
菟席片付けてより花の宴	硯涯
青柳の影ユラユラと揺る	イスタダ
ナオ適当に生きてをるなりうらけし	重直
最後の旅はブルトレイン	青春
一陣の風が憂鬱吹き飛ばす	倫也
見渡す限り雪の平原	硯涯
飲みかけの熱燗揺らす人恋し	イスタダ
轟肩チームの今日もまた勝つ	重直
セクシー女優乗車カードに起用され	青春
クレオパトラを目指す政権	倫也
エジプトの王朝運命辿らぬか	硯涯
十字路に射す弓張りの月	イスタダ
寅さんと同郷という秋つばめ	重直
冷ややかな目の浮世絵髑髏	青春
ナウ近づくと火傷しそうな曼珠沙華	倫也
凶鑑片手に余念なき日々	硯涯
一步また次の一步を進む帰途	イスタダ
青帝でんと居座つてをり	重直
四五年花も嵐も懐かしく	青春
御機嫌ようと鶯の鳴く	倫也

首 2015年5月26日、尾 2015年10月8日 文音

## 7. 漢俳・湾俳

中国の文人・学者たちと日本の俳人たちの交流の中から生れた「漢俳」は、漢字五字・七字・五字から成る漢詩の新詩型で、1980年5月、大野林火（1904～1982）を団長とする日本の俳人訪中団の歓迎の席で、当時の仏教協会会長趙樸初（1907～2000）が作ったのが最初である。

にほんはいじんほうかだんにおくるあり  
有贈日本俳人訪華団三首 其三 趙樸初

緑陰今雨来	緑陰今雨来たる
山花枝接海花開	山花の枝海の花に接ぎて開き
和風起漢俳	和風漢俳を起さん

2005年3月には劉徳有（1931～）を会長とする漢俳学会が創設され、2013年には、『中国漢俳百家詩選』（中国人作家100人、日本人作家27人の作品を取録）が刊行されている。

とんでせいあんにいたりしかせつにさんかす  
飛抵西安參加詩歌節 劉徳有

尋詩訪曲江	詩を尋ねて曲江を訪ふ
投宿西安雁塔傍	投宿す西安雁塔の傍
夢中回大唐	夢の中大唐に回らん

漢俳学会名誉会長を務めた林林（1910～2011）が京都の平安神宮で詠まれた作品を一首紹介する。

きょうとのへいあんじんぐう  
京都平安神宮 林林

花色満天春	花色満天の春
但願剪得一片雲	但だ願ふ一片の雲を剪り得て
裁作錦衣裙	裁ちて錦の衣裙を作らんことを

湾俳は、黄靈芝氏の『台湾俳句歳時記』（292頁）の中に出てくるのが初出で、黄氏の造語かと思われる。その中で黄氏は、「湾俳を①七字から十二字を限度とする。六字は可。十三字は不可。②季語を利用する。③二句一章を基本とする。」と述べているが、一方で、台北俳句会の会員でもある呉昭新氏は、湾俳を、「生粋の台湾語（発音及び漢字）で詠まれた俳句で、字数は十字前後から成る。」とし実作も試みられている。（ ）は呉氏自身が添えた俳句。十字から成り、切れはないが3字／4字／3字の構成になっているようである。

黑暗天吼聲不止台風近	呉昭新
（闇空に吼える声あり明日台風）	
回家路銀杏葉路影子長	呉昭新
（銀杏散る帰宅の道の影長し）	
大年夜只有兩老相對坐	呉昭新
（大晦日鍋をはさむは老い二人）	

湾俳については現在諸説あり、詩型はいまだ必ずしも確立しているとはいえず、実作者もそんなに多くはないようであるが、今後台湾において、新詩型の文学として普及し定着していく可能性を秘めているように思われる。

## 8. 結 び

現在、台北俳句会の会員は、台湾人（原住民を含む）、台湾在住の日本人、台湾国外の台湾人、日本人（日本在住）などさまざまである。20数人はいると思われる台湾人の会員は、嘗て日本統治時代に日本の教育を受けた日本語世代の人たち（日本語人）であり、それらの人々を中心に俳句が作られ続けてきた。しかし、その人たちはすでに90歳前後となり、一方で若い世代の会員の数が極めて少ないのが現状である。若い人たちをいかにして育てていくかが大きな課題になっており、その意味においても、学生日語俳句大会の果す役割は大きい

ものがある<sup>④</sup>。この大会が今後より充実発展し、台湾の俳句人口の裾野が広がることを願わずにはいられない。

【注】

①第一期の明治期の台湾俳壇の略年表を参考までに掲載する。この年表の作成にあたり、明道大學助理教授沈美雪氏「明治期の台湾俳壇について－俳句受容の始まり－」（2007年度日本語文・日語教育國際學術研討會 會議手冊）を参考にした。沈美雪氏は現在、中國文化大學日本語学科の副教授である。

明治期の台湾俳壇略年表…第一期 明治期

年	台湾俳壇・文芸・教育・関連事項
1895年（明治28年）	台湾總督府設置（1945年廢止）。5月、樺山資紀、初代台湾總督就任。 6月、伊沢修二、國語伝習所を設立、日本語教育を開始。
1897年（明治30年）	1月、柳原極堂（本名正之。正岡子規の友人）、松山で俳誌『ホトトギス』*（正岡の俳号「子規」にちなむ）創刊。俳壇勢力としての日本派（新聞「日本」で活躍した俳人たちのこと）は、新聞「日本」と俳誌『ホトトギス』で飛躍的に地方に拡がり、海外にもその投句者が見られるようになった。 6月、旧派宗匠残夢庵高橋窓雨（鋼太郎）渡台。
1898年（明治31年）	5月、「台湾日日新聞」発刊。旧派宗匠高橋窓雨がその俳壇欄の選者を勤める。 10月、俳誌『ホトトギス』、場所を松山より東京に移し、高浜虚子が継承する。 10月、台湾在住俳人、初心の「船頭が禪洗ふや散る柳」の句が『ホトトギス』の募集課題俳句に掲載される。
1899年（明治32年）	10月、『ホトトギス』誌上に、初めて台湾の句会（「台北句会」）が紹介される。
1900年（明治33年）	2月、渡辺香墨（助治郎）が台湾總督府法院檢察官として訪台。秋、香墨居で句会が開かれ、「南蛮会」が結成される。会員は、香墨のほか、小林里平（俳号李坪）・藤井乾助（俳号烏韃）・堀尾空鳥など。
1901年（明治34年）	5月、日本派の俳句選集『春夏秋冬』春之部刊行、高浜虚子編。『日本』『ホトトギス』登載句を材料として選句。
1902年（明治35年）	春、日本派俳人が〈竹風吟壇〉（台北の俳句結社。『相思樹』の母体。）という名で、「台湾民報」を中心に投句。 9月、子規没。
1904年（明治37年）	「台湾民報」発行停止。 5月、渡辺香墨、台北にて俳誌『相思樹』（台湾最初の俳句雑誌）創刊、選者となる。選者としては、他に小林李坪など。
1905年（明治38年）	1月、岩田鳴球（久太郎）が三井物産の台湾支店長として再度渡台。
1906年（明治39年）	2月、渡辺香墨離台（『華麗島文学誌』では、明治38年12月とする）。その後、虚子の教えを直接受けた岩田鳴球が台湾俳壇の第一人者となり、『相思樹』の主導権を握るようになる。 5月、岩田鳴球が「中部台湾日報」で「白頭鵠」を連載し、台湾俳人の句を酷評。



1907年（明治40年）	5月、小林李坪・田原天南・堀尾空鳥の三人が句会を興し、「緑珊瑚」と命名される。
1908年（明治41年）	5月、『緑珊瑚』一周年記念号発刊。 10月、河東碧梧桐、台湾縦貫鉄道全通記念に記者として渡台。緑珊瑚会が自由律に転じる。堀尾空鳥が離台、朝鮮に赴任。
1909年（明治42年）	7月、『緑珊瑚』二周年記念号発刊。
1910年（明治43年）	1月、『緑珊瑚』が年刊から月刊になり、第一号が8月に刊行された。 4月、小林里平（俳号李坪）『台湾歳時記』刊行（河東碧梧桐序、東京政教社出版）。
1911年（明治44年）	2月、『相思樹』六巻四期で停刊（2月25日）。 3月、『緑珊瑚』五巻二号をもって廃刊。

\* 俳誌『ホトトギス』は、創刊時（1897年）は『ほとゝぎす』であったが、1901年10月『ホトゝギス』に、1911年10月に現在の『ホトトギス』に改められた。

- ② 岡崎郁子著『黄靈芝物語——ある日文化作家の軌跡——』平成16年（2004）研文出版刊。黄靈芝年譜などを参考に作成した。なお、この年表は、拙稿「台湾の俳壇の現状と課題」（『中日文化論叢』第31号〈中國文化大學日本語文學系學報 2014年7月刊〉）に掲載したものだが、今回はそれに加筆修正を加えた。
- ③ 山本孕江の俳誌『ゆうかり』は、昭和20年（1945）休刊されたまま、復刊されることはなかった。その孕江の台湾俳句確立の意志を受け継ががために、ユウカリの学名である、「ユウカリプタス」（「良く覆った」という意味のラテン語。ユウカリが砂漠などの乾燥した土地でもよく育ち、樹の葉で大地を「良く覆う」ことから名づけられたという。）を採って誌名とした。台湾俳句が、恰もユウカリの樹が砂漠に繁っていくかのように、再び広まっていくことを祈念して命名した。（『ユウカリプタス』創刊號、発刊の辞〈義守大學應用日語學系花城可裕氏〉より抜粋）
- ④ 連句の仲間であり、台北俳句会の会員でもあるイスタダ・アリーマン氏は台湾の原住民布農族で、第三回全国日語俳句大会の応募者である。当時、銘傳大學應用日語學系の学生だった。現在、俳句のほかに、台湾の短歌、川柳の会にも所属し精力的に作品を発表している。また、筆者の属している俳誌『天頂』の仲間でもあり、将来が期待される一人である。